

# 袋足のない鬲

大 貫 静 夫

## 1. はじめに

本稿は中国古代における代表的な容器である鬲そのものをあつかうものではない。文字としての「鬲」の存在がそのままその時代、その地域における中空三足をもつ煮沸具の存在をかならずしも物語るのではないと言うことを述べることにある。このようなことは日本でも漢語研究者の世界では常識に属するのであろうが、考古学、とくに日本考古学の世界ではかならずしもそうではないらしいということを知ったからである。日本考古学が関わりをもっているのは「鬲」あるいはその異体字という「𪔐」であるが、ついでに「鼎」にも触れておく。

東北地方の亀ヶ岡文化にまれに中空の三足土器がある(図1)。現在知られる4例の分布はすべて青森県内にあり、特異な分布を示している。これを中国の特徴的な中空三足の煮沸具である鬲と関係があるとするのは喜田貞吉(1927)以来の長い伝統がある。1984年に青森県平舘村今津遺跡の調査で発見され、ふたたび注目されることになった(新谷・岡田 1986)が、その論拠は亀ヶ岡文化には珍しい器形であり、周辺地域を見渡すと中国の鬲が似ているという程度の議論である点は変わらない。これについては中山清隆(1992)がその問題点をよくまとめているのであまりふれない。

この問題の要点は早く喜田貞吉が注意した上北郡甲地村黒志多(現 東北町黒洲田)出土の三足壺についての指摘以来ほとんど変わっていないと言ってよい。当時から、小さな瘤状の四足をもつ土器が見つかっており、喜田は中国の青銅器との類似に注意していたが、黒志多の土器が三足であることから鬲を模倣したものに違いないと確信したのである。したがって、大陸の鬲の中で、同時代のものを抽出し、どこで接点を持ちえたかという点で分布が重要な意味を持つことになる。

高橋龍三郎によれば、現在知られる4例のうち3例は大洞C2式終末からA式期のもので、虚空蔵例のみが大洞C1式で、A式との類似点も指摘して結論を留保しているが、現状での最古の段階に属する可能性を指摘し、内在的な自生論では説明しにくいこと述べている(菊池ほか 1997)。大洞C2式からA式段階には列島の東西は緊密な関係にあったことが知られており、東日本系の土器が大分にも及んでいる(小林 2000)。現在大洞C2、A式は九州の山ノ寺、夜臼式に並行(同上)し、その想定されている実年代(寺沢 2000:19)が紀元前4から5世紀であれば、中国の戦国時代(C1式であればさらに古くなる。)に相当する。とすれば中国東北地方の内陸に広がる、西周から戦国時代とされる西団山文化の鬲とは年代的に接点をもっていたことになる。ただし、西団山文化は内陸の文化であり、沿海部にまで広がることはないことに注意すべきである。

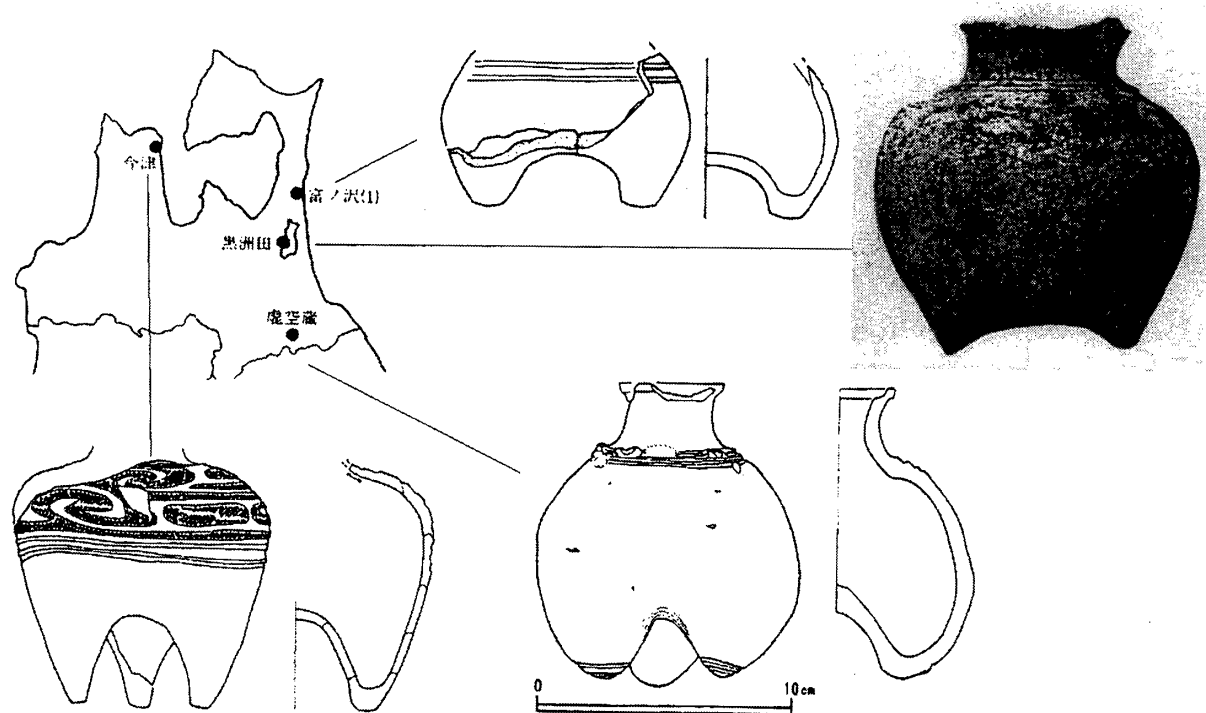


図1 青森県出土の縄文晩期三足土器（菊池ほか1997より作図）

鬲は大陸では華北の龍山時代に生まれ、その後各地に広がり、中国東北地方にも広がる。図2は問題となる紀元前一千年紀における中国東北地方の鬲・鼎・甗を含む三足器の分布である。その外側には筆者が続極東平底土器と呼ぶ土器を煮沸具として用いる社会が広がっており、鬲を受け入れることはなかった。この三足器の地域でも戦国時代には、カマドの普及とともに煮沸具としての鬲はその役割を終え消滅する。

日本列島との間には朝鮮半島から沿海州、アムール川流域にかけて広い空白地帯が存在する。これは希少品としての金属製武器や石製装飾品の分布とは異なり、たんに未発見というものではなく構造的な空白である。したがって、大陸側の日本海沿岸部の住民が日本海を渡り日本列島のどこかに漂着しても鬲あるいはそれについての情報をもたらすことはありそうもない。

ところが、このような理解について異論が提出されていたことを最近知ることができた（金関恕1995a, b）。魏書東夷伝沃沮の条に、埋葬儀礼に土製の「鐙」を用いたという記事「其葬作大木槨，十餘丈，開一頭作戸。新死者皆假埋之，才使覆形，皮肉盡，乃取骨置槨中。舉家皆共一槨，刻木如生形，隨死者為數。又有瓦鐙，編縣之於槨戸邊。」に注目し、「鐙」は「鬲」の異体字であるから、土製の鬲が紀元後三世の沃沮で用いられていたというのである。沃沮は朝鮮半島の東海岸に広がっていたと考えられているから、紀元後3世紀に土製の鬲を用いた人々が日本海の対岸にいたことになり、それがさらに時代的にさかのぼるとすれば、それが東北に見られる三足土器の模倣の相手であった可能性が高いという。そして、日本海沿岸部からはどの時代であっても鬲が出土していないが、今後の発見に期待したいという。「瓦鐙」とあるのは「鐙」が金偏であり、本来は金属製のもの

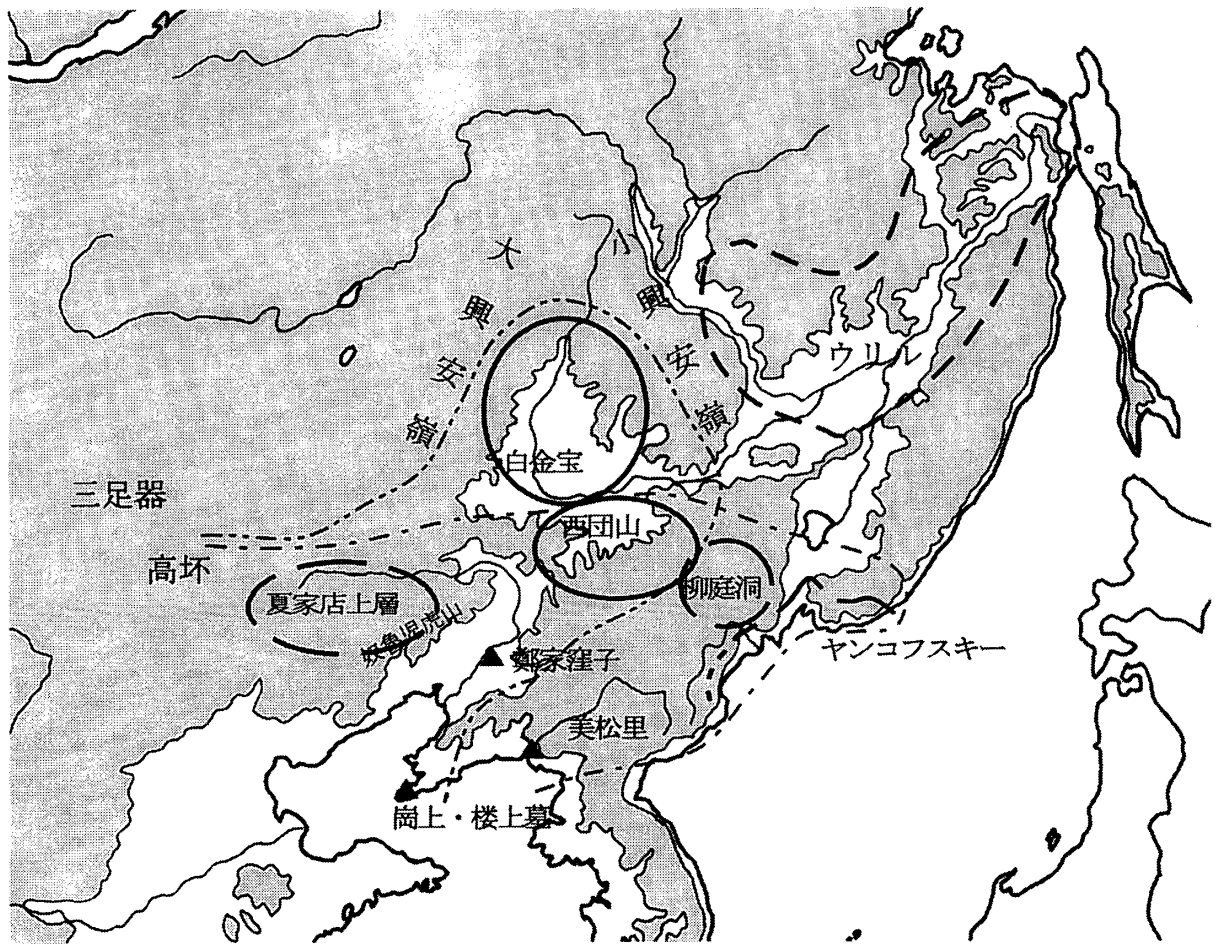


図2 紀元前1千年紀の極東（大貫 1998）

ので、その土製というものであろうか。この「鏝」が袋状の三足器としての鬲であったとすれば、亀が岡文化の中空三足土器の理解に重要な意味を持つことになるのは当然である。漢籍に疎く心許ないが、それら文字の示す実体について筆者なりに調べ、知りえた結果を記すのが本稿の目的である。以下では、「鬲」という文字で歴史上指し示されたものすべてが現在考古学で、あるいはさらに一般的に鬲として分類されているもの、つまり袋状の三足をもつ煮沸具を指していたわけではないことを述べるため、混乱が生じるおそれがあるので注意されたい。

中国古代の各種の青銅容器の現在の名称は、器体に書かれた銘文などからそれらがその時代にどう呼ばれていたかを基本に決められ、同一の形の土器に援用されているが、それほど単純ではない（林 1984）。「鬲」などは問題がない方であるが、文字の存在から特定の器種の存在を主張するような事態になればその限りではない。

『諸橋大漢和辞典』の「鬲」（45672）の項には、「かま」、「土がま」という別の意味の存在が記されている。漢字と実体とが一对一の関係にないことを明らかにし、そのための混乱を避けるように、あえてひらがなで表記しているのであろう。

また、鬲と類似した器種である「鼎」の文字についての例がこのような場合参考にされるべきであろう。漢語研究者である橋本萬太郎は「鼎」という文字を取り上げて、「大陸東南隅に住む漢民族にとっては、一中略—いまでも毎日使っているナベそのものをあらわすことばであって、博物館にあるあの「鼎」をあらわすことばではない」（橋本 1983：125）ことに着目して、その歴史的背景を論じた。「鼎」という文字は現在一部の地域では三足の容器を示さないことがあることに注意されよう。ただし、橋本は漢民族の移動、南下の波によってこの現象を説明しようとしているが、考古学的知見からは別の説明が可能であると思うことは後述する。

『諸橋』や橋本の指摘によれば、文字自体からその実体を特定することはできないことになる。それではどうするか。文字の存在からいまだ見たことのない実体を仮定するより、考古資料のある場合は考古資料から、あるいは同時代の文献資料があればそれから文字の指し示す内容を考えるというのが筋道ではなかろうか。考古、文献資料から同時代では関係する文字がどのようなものを指していたのかを、諸先学の研究に導かれながら見ていくことにしたい。

## 2. 「鬲」と「鑑」の実体

『爾雅』釈器では「鼎の款足なるものはこれを鬲と謂う」、つまり袋状の足の鼎を鬲というと記す。さらに青銅器の金文自名器によれば、やはり袋状三足の容器が「鬲」と呼ばれていたことがわかる（林 1984：42-44）。実物は西周から春秋時代、そして新しくは漢代の例が知られている。これが考古学上の分類としての「鬲」である。

なお、644年に完成したとされる『晋書』肅慎氏、一名挹婁伝には「無井竈，作瓦鬲，受四五升以食。」とあり、まさに土製の「鬲」を作ると書いているのである。肅慎は「東は大海（日本海）に沿」（同書の訳注 p.69）っているのであるから、この「鬲」が袋状の三足器を示すのであれば、晋書の典拠した原資料がいつのものか分からないが、さらに遅い可能性のある時代まで日本海の対岸の大陸側で用いられていたものであり、当然より古い時代にもその地にあった可能性を示すことになる。『魏志』では挹婁は沃沮の北にいたとされるのであるから、あわせて大陸日本海沿岸起源の有力な論拠になると思う。また、この「鬲」を袋状三足の鬲のことであるとする、その記事の典拠とした原資料がさらに古かろうと、鬲の分布した範囲の中に肅慎を求めなければならなくなる。肅慎の分布の東は日本海に至るのであるから、日本海の対岸にまで鬲が分布していたはずであり、将来発見されるであろうという議論がこれまた出てきそうである。

歴代の東夷伝についての江畑武・井上秀雄による訳注（平凡社東洋文庫264『東アジア民族史1』：88）では、問題の「鑑」を釜、鼎の一種として、我々の考える鬲（鼎の一種？）とは限定していない。これは、漢字の意味を知るさいにまず紐解くことになる『諸橋大漢和辞典』の「鬲」項の説明と合致する。それには「かなえの一種」のほかに「かま」、「葬喪のときにもちいる土がま」という用例があることを挙げている。すなわち、「鑑」は「鬲」の異体字として認めても、なお我々の考える袋状の三足器とは異なる容器を指すことがあったというのである。

実は筆者はこの『東アジア民族史1』はかつて何度も目を通しており、このような記載があることは承知していたが、たとえば、図2に示したような鬲の分布図を作る際にはまったく考慮することとはなかった。東沃沮条の「鑑」については、不勉強のため鬲の異体字とは知らず訳注を素直に受け取り、おそらく釜であろうと考えたからであり、肅慎条については「鬲」とはあるが、このような新しい時代に袋状三足の土製鬲が大陸のどこにもありようがなく、訳注（同書 p.71）にも「瓦鬲（土釜）」とあり、以下に紹介するように中国側の論文でも同様に解しており、これも素直に受け取ったためである。

この肅慎の「鬲」を袋状三足の鬲と解して、それを伴う西団山文化を肅慎であるとする一つの根拠とかつて中国でも主張されたことがあった。そうすると西団山文化は内陸に広がり、日本海に達することはないことから、地理的な問題が生じることになった。しかし、現在ではこのような比定をする人はおそらくいない。ここで記される「鬲」を袋状三足の鬲と解する人はおらず、釜や鍋の類であると解すれば日本海に沿う別の考古学文化が候補となるからであり、『東アジア民族史1』の訳注と変わらない。

かつての西団山文化肅慎説の根拠の一つとなった「鬲」の解し方について、管見するかぎり中国では武国勳（1992）が、丁寧に説明してくれているのを最近知った。いまだに一部に西団山文化肅慎説を信じている人がいるようだから、なぜ誤りなのかを逐一説明するという趣旨で「鬲」にも言及したものである。

すなわち、漢代の『方言』によれば、漢代には鍤（釜）を「鬲」と記した地域があり、『礼記』に出てくる「鬲」を唐代の孔穎達は「罍」と解しているが、それは漢代の鍤（釜）に似た器形であった。漢代には「鬲」は鍤（釜）を指すことがあり、晋代には「鬲」は鍤や鍋と同義語であり、袋状三足器を指すのではないという。以下に補足しながらより詳しく見ておこう。

長江下流域では、漢代の『方言』に「鍤北燕朝鮮洌水之間或謂之鍤或謂之鉞江淮陳楚之間謂之鍤或謂之鍤吳揚之間謂之鬲」（佐藤編 1999： p.69）とあり、呉揚の間では、「鍤」を「鬲」と言ったと記されていることも重要であるが、同一の器物に同時代でも地方によってさまざまな呼称があったことが重要であろう。「鍤」は『方言』によれば「釜自関而西或謂之釜或謂之鍤」（同）とあり、ある地域では釜を指していた。「鬲」には釜（かま）を指すことがあると『諸橋』が記していることはすでに述べたが、漢代に遡ることが分かる。また、上でも述べたように福建省の方言では現在でも「鼎」という言葉が用いられているが、それが鍋（なべ）を指すということは漢語方言研究者の間ではよく知られている（橋本 1983, 石崎 1999）。なお、漢代の呉揚では「鬲」で、現在の福建では「鼎」なのは煮沸具の歴史的展開が関与していそうである。しからば、基本は漢代の作とされる『呉越春秋』夫差内伝第五に見られる「鑑」は何を指したものであろうか。「鑑」が「鬲」の異体字とすれば、これまで見てきたとおり、袋状の三足器を指すことはなさそうである。呉の地の記録であればなおさらである。

前漢前期に属する湖北雲夢大墳頭1号墓出土の遺策には青銅製の釜（図3-1）と甗を「金鬲甗

各一」と記す（孫 1991：332，湖北省博物館 1981）。この大墳頭一号墓の釜は底部に鼎足の名残のような小さな足が4つ付いている。自名に従うのであれば「鬲」と呼ぶべきだが報告では「釜」としている。けっして袋足の鬲ではない。漢代の湖北では四つの突起状の足をもつ釜を「鬲」と呼んでいたのである。これに類似する土製の容器は戦国時代の山東の墓によく見ることができる。乳状の三足のついた図3-2は戦国中期に比定され、報告では「鬲」に分類されている。同2と同様の同3はやはり乳状の三足がつくが、同4の丸底の土器とともに報告では「釜」に分類されている。いずれも戦国中期ないし後期とされている。魯国古城の包含層では袋足の鬲は春秋時代までで戦国時代にはこのような退化した鬲あるいは釜と呼ぶものに代わっている。現代の考古学者もどう呼ぶべきか困惑していることが分かる。鬲がこのような連続的変容をしているのであれば、さらに乳状の足も失った釜を当時の人が「鬲」ともし呼んでいたとしてもうなずけよう。

つぎに注目すべきは、沃沮条に記された、葬儀に際し、瓦製の「𩚑」を用い、米をその中に入れて、これを櫛の戸の辺に結びかけるといふ習俗であろう。金関の注目するように、『儀礼』士喪礼に類似する。『諸橋』は「鬲」の用例の一つ「葬喪のときに用ひる土がま」の説明に『儀礼』を引いて、「尸體を沐浴する米のとき汁を沸かし、又、鬻を煮、蓋をして其のまま重木につるし、神を憑依させる資とするに用いる」と説いているものである。『礼記』喪大記について、唐代の孔穎達の疏は「重鬲，謂縣重之罍也。是瓦瓶，受三升。」とする。「罍」は『説文』では「罍，缶也」とある。やはり、鬲は必ずしも袋状の三足器だけではない。このような儀礼の類似をいかなる歴史的な文脈で理解すべきなのか興味深いが筆者の理解をこえるところであり、それはここでは問わない。

したがって、「𩚑」が具体的にどのような器種を指したものを特定できなくとも、沃沮の地と目される地からかつて袋状の三足器は知られていないことがやはり重要な意味を持つ。われわれの知る文字と指し示す実体がつねに一致するとはかぎらない以上、個別具体的に検証するしかないであろう。沃沮の地と目されている日本海沿岸地域からはかつて袋状の三足器が出たことはないのだから。土製の鬲が大陸側の考古資料から消えた時代に用いられた「鬲」という文字が袋状の三足器を指す保証はどこにもないと言ふべきであろう。

漢代の朝鮮半島の三足器として思い浮かべられるのは、鼎であろう。鬲は漢代にも祭りに用いる

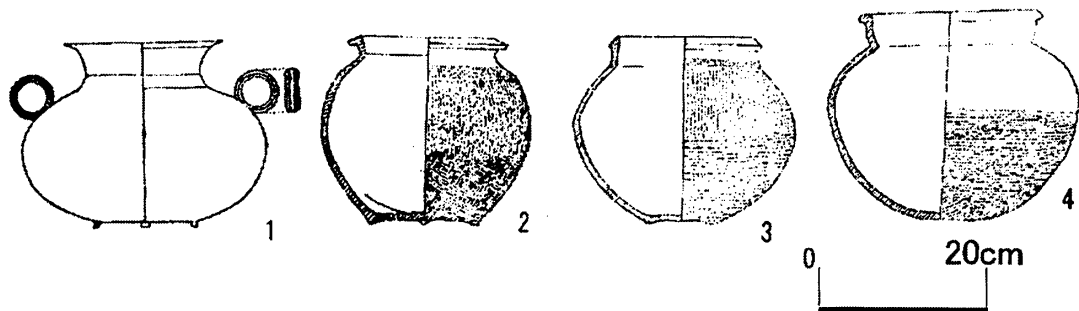


図3 戦国・漢代の釜と鬲

(1：湖北雲夢大墳頭 M 1 2：山東新泰郭家泉 M 5 3：山東曲阜魯国故城 M 1 4：同 M54)

青銅製のものが残っていた（林 1984）が、日常用の土製のものはなくなっていた。他方、鼎は青銅製が前漢武帝期以後は減少し、以後は土製が副葬されるが、後漢後期には見られなくなる（孫 1991）。朝鮮半島からも、青銅製鼎は楽浪土城を始め、南部洛東江流域から見つかっている。土製の鼎も遼東の後漢の墓から多く出ているし、楽浪土城からも出ている（鄭 1996）。高句麗ではさらに遅くまで作られており、青銅製の鼎が年代的には魏志東夷伝の年代になる。しかし、土製の鼎がその時期まで作られていた証拠はないから、「鬲」が鼎であった根拠もない。

河南省出土の春秋前期に属する実足の鼎に「鬲」と自名するものがあり、林は、鬲は鼎の属であり、用途も同様であるから、鼎が鬲と呼ばれることもありうる指摘していることに注意しなければならない（同上：40）。この鼎は淮河流域信陽市付近に比定されている江国から出たもので、唐蘭（1954）は江国では鼎と鬲の区別がなかったのではとしている。これは今問題としている時代よりはるかに古くあまり関係はないが、袋状三足の鬲が普及していた時代でもこのような混乱があったことは注意されよう。

また、いつから始まったのか筆者にはつまびらかではないが、中国考古学界では戦国時代燕の地域から出る、形態上からは鼎に入るべき実足の三足器を「燕式鬲」と呼んでいる。「燕式」と限定してはいるが、現在でもそのようなことがある。いずれにしろ、鼎は亀ヶ岡文化の袋状三足の祖形としての議論とは関係がない。

ここまでで、本稿の目的はすでに達しているのであるが、以下余談として、大陸側で春秋、戦国時代に鬲や甗という袋状三足をもつ土器が広がっていた地域はどこであったかという点についてつぎに触れておきたい。

### 3. 袋状三足器としての鬲の展開と終焉

大陸との関係でつねに話題となる玦状耳飾りの伝播経路としての中国長江下流域から東シナ海を越え、さらに日本海に沿って北陸にいたる第四の経路が登場することになる。第三の道が渤海使の道であれば、これは遣唐使の道であるが、このような経路が縄文時代早期末までさかのぼるというのもまた驚くべきことである。中国の研究者でこの経路を早くから重視していた安志敏はその後、鬲もその経路で伝わったものの一つであると指摘した（安 1990）。安は青森県今津の三足器は中国東北の鬲とは大きく異なるし、また朝鮮半島には分布しないからこの経路でもないとした。そして、長江下流域江南地方の春秋・戦国時代の鬲が近いから、玦状耳飾りと同様に東シナ海を渡る経路で伝わったというのである。袋状三足というアイデアだけであれば器形の類似は大きな根拠にはならないのであるが、その出発点の可能性をもつ大陸側の沿海部で春秋・戦国時代に鬲を用いていた地域はかなり限定されるということを指摘した点が重要であろう。

山東地域の鬲の消長を知りうる例として、魯国古城所在の墓地の副葬品がある（山東省文物考古研究所 1982）。ここでは春秋中期までは短足の鬲があるが、春秋末戦国初以後の墓には鬲が副葬されず、釜と呼ぶものに代わっていることはすでに述べた。斉の地であった章丘寧家阜墓地（山東省

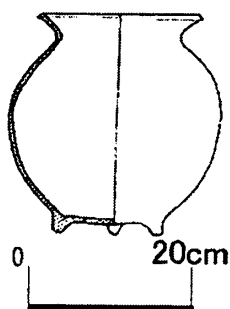


図4 南黄荘出土の鬲

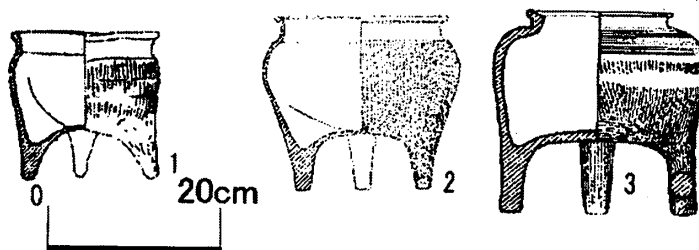


図5 長江中・下流域の鬲

(1:六合程橋 M 1 2:趙家湖 LM15 3:九店 M91)

文物考古研究所編 1993)でも、春秋末ないし戦国初まで袋状の退化した鬲が副葬されるが、戦国前期以後は鼎に代わっている。齊魯の位置する山東では戦国時代には鬲は用いられず、かつ春秋期の鬲もまた足が退化していた。山東半島沿海部の様相がはっきりしないが、黄海に近く西周中・後期に比定されている乳山南黄荘石槨墓で「鬲」とされるもの(図4)は短い実足に近いものである。河北北部の戦国時代燕式鬲と呼ばれるものもやはり実足である。したがって、山東、河北は我が国東北地方の三足器の故郷である可能性は乏しい。

寧鎮区と太湖区からなる江浙区では春秋末から戦国前期初では、土製煮沸具に鼎と鬲と釜がある。六合程橋 M 1 の鬲(図5-1)は春秋末期に比定されている。鬲は同時代の春秋後期に比定されている内陸の楚の鬲(図5-2)に類似している。その後の戦国時代前期以降には甗もあるがおもに鼎になる(彭 1987)。この変動には紀元前473年春秋戦国時代の境に呉が越に滅ばされるという歴史の流れも反映しているのであろう。これは内陸の楚の地域で、たとえば江陵九店東周墓で戦国後期(図5-3)まで鬲の副葬があるのとは異なる。

長江下流域を含む中国南方では、印文陶が広がっていた時代に寧鎮区および贛鄱区の主な煮沸具が袋状の鬲と甗であり、呉のあった太湖区では実足の鼎であり、ほかの地域も鼎と釜であり、袋状三足器である鬲と実足三足器である鼎の両者の分布が異なることが知られている(李 1998)。というよりも、華北に発する鬲の分布の南限がこの辺にあるということであり、そのことが、漢代までに煮沸具が鬲や鼎から釜に変わった後も、漢代の書『方言』によれば呉揚の間で、釜に属す「鍑」を「鬲」と呼び、福建方言で現在も「鍋(なべ)」を「鼎」と記すことと関係するのであろう。橋本萬太郎のように漢民族の波状的な南下移動の結果と見るまでもなかろう。

長江下流域でも、袋状の鬲は戦国時代初で終焉を迎えていたことになり、それ以南にはなく、東シナ海沿海部ではこの時期になくなる。ただし、長江下流域の最終末の鬲の足は齊魯地区の同時代のやはり最終末の退化した足に比べればまだ袋状を残している。

以上に見たように、大陸側の沿海部で袋状の鬲を用いていたのは戦国時代初頭(前5世紀前半)までであれば山東から長江下流域が候補に挙がる。袋状三足の形態を重視すれば長江下流域となるが、大陸起源説では袋状三足のアイデアだけを模倣したことになっているので、器形や機能あるい



は製作技法など細かい議論をしても詮無いことではある。袋状三足ではほかに遼東半島の甗もあるが、これは省略する。

### 3. おわりに

以上、「鼎」にも言及しながら、肅慎の「鬲」および沃沮の「鏝」について、古い文献にこれらの文字が使われていたとしても、それがつねに現在の考古学での分類名称である、袋状三足の鬲とはかぎらないということを記した。このことは、中国考古学や東洋史、古漢語の世界ではすでに共通の理解となっていると考えられるものであり、筆者独自の見解というものではない。そして、漢語方言上の問題も考古資料から見ると多少は理解しうる部分があることを記した。

だからといって、亀ヶ岡の三足器を大陸起源とする説が完全に否定されるわけではなく、ただ傍証とされたうちの 하나가消えるにとどまる。依然として瘤状四足から袋状三足への形態上の飛躍と大陸側との分布上の飛躍のどちらを重視するかが分かれ目であろう。その点では、袋状三足の世界に出現した大墳頭1号墓出土の瘤状四足器は先後は逆であるが興味深いものがあるだろう。

筆者は現状の大陸側の理解に基づくかぎり、東北の三足土器を鬲の模倣で、大陸起源とする見方がより合理的であるとは思えないので、その経路についての議論に参加するつもりはない。ただし、たった4例で起源に関わる祖形あるいは出現年代を論じてよいのかという問題は残っていると言うべきであろう。

菊池徹夫先生からは文献をご教示していただき、古漢語については本研究科の大西克也先生からご教示をえました。遠藤光暁先生を代表とする漢語方言科研究班にかつて参加したことも参考となりました。記して謝意を表します。

### <引用・参考文献>

- 石崎博志 1999 「なべ〔鍋〕 なべぶた〔鍋蓋〕」 『中国における言語地理と人文・自然地理(5)』 106-109頁。
- 金関 恕 1995a 「『魏書』東夷伝沃沮の鏝と青森県今津出土の鬲形土製品」 『西谷眞治先生古稀記念論文集』 3-14頁。
- 金関 恕 1995b 「日本海」『アジアの古代文明を探る』 108-120頁。
- 菊池徹夫・岡内三真・高橋龍三郎 1997 「青森県虚空蔵遺跡出土の共同研究」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 42-4, 81-103頁。
- 喜田貞吉 1926 「奥羽地方のアイヌ族の大陸交通は既に先秦時代にあるか」 『民族』 1-2, 83-94頁。
- 喜田貞吉 1927 「奥羽北部の石器時代における古代シナ文化の影響について」 『民族』 2-2, 1-16頁。
- 国立歴史民俗博物館編 2001 『縄文文化の扉を開く』 国立歴史民俗博物館。
- 小林青樹 2000 「東日本系土器からみた縄文・弥生広域交流序論」 『突帯文と遠賀川』 1193-1220頁。
- 佐藤進編 1999 『中国における言語地理と人文・自然地理(2)-宋刊方言四種影印集成-』 平成9-11年度科学研究費報告書第2分冊。

- 新谷 武・岡田康博 1986 「青森県平館村今津遺跡出土の鬲状三足土器」 『考古学雑誌』 71-2, 109-114頁。
- 諏訪哲郎 2000 「「鍋」と「鑊」「鼎」の分布をめぐって—波状拡散説と基層言語差説の検討—」『中国における言語地理と人文・自然地理(7)』 106-109頁。
- 寺沢薫 2000 『日本の歴史02 王権誕生』 講談社。
- 中山清隆 1992 「縄文文化と大陸系文物」『季刊考古学』 38, 48-53頁。
- 橋本萬太郎 1983 「ことばと民族」『民族の世界史 5』 122-158頁。
- 林巳奈夫 1984 『中国殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器綜覧—』 吉河弘文館。
- 鄭 仁盛 1996 「韓半島出土（青銅）鼎の性格」『古文化』 48, 115-152頁。
- 湖北省博物館 1981 「雲夢大墳頭一号漢墓」『文物資料叢刊』 4, 1-28頁。
- 山東省文物考古研究所・山東省博物館・濟寧地区文物組・曲阜県文管会 1982 『曲阜魯国故城』 齊魯書社。
- 山東省文物考古研究所編 1993 『濟青高級公路章丘工段考古發掘報告集』 齊魯書社。
- 山東大学歴史系考古專業・山東省新泰市文化局 1989 「山東新泰郭家泉東周墓」『考古学報』 1989-4, 449-472頁。
- 孫 機 1991 『漢代物質文化資料図説』 文物出版社。
- 唐 蘭 1954 「郊県出土の銅器群」『文物参考資料』 1954-5, 38-40頁。
- 武 国勳 1992 「西团山文化不是肅慎文化」『西团山文化學術論文集』 176-178頁。
- 彭 適凡 1987 『中国南方古代印紋陶』 文物出版社。
- 湖北省宜昌地区博物館・北京大学考古系 1992 『当陽趙家湖楚墓』 文物出版社。
- 湖北省文物考古研究所編 1995 『江陵九店東周墓』 科学出版社。
- 北京大学考古実習隊・煙台市文物管理委員会 2000 「乳山南黄莊石槨墓」『膠東考古』 244-268頁。
- 李 伯謙 1998 「我国南方幾何形印紋陶遺存の分区、分期及其有關問題」『中国青銅文化結構体系研究』 195-217頁。
- 『晋書』『三国志』『十三經注疏』の引用は中華書局版によっている。